
欲求

かみなせ しゅら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

欲求

【Nコード】

N6831Y

【作者名】

かみなせ しゅら

【あらすじ】

フロイト先生に馬鹿にされてる最近、一日が夢ばかり

水泳大会が巨大な室内プールで行われている。僕はどうやらバタフライで出場らしい。長い列をなして、プールのコースごとの飛び込み台の前に人がたくさん並んで自分の出番を隣同士ガヤガヤ話しながら待つ。コースは20あるかもつとあるかくらいで、それだけに並ぶ選手の数も多い。

金髪の外国人のハーフラしき子が僕の後ろの列で、あれこれと僕に今飛び込んで泳ぐ選手の批評をしてくる。なんとなく生意気な子ではあるが格段嫌な訳でもないので話しを続ける。

そしてどうやら金髪によるとその隣の冴えない黒髪の男の子は友人で、結構な金持ちらしい。

僕は二人と順番待ちの長い間話していて、金髪よりもこの冴えない黒髪の子に好感を持った。

ついに僕の番が来た。鉄砲が鳴り響く。飛び込む。冷たさは、ない。よし。最初は焦っちゃ駄目だ。ゆっくり泳ぐ…つもりだった、が、僕のバタフライは凄い速さで進み、他の選手はどんどん視界の隅から消えてゆく。

僕は意気揚々として、半分ながらスパートをかけた。すると案の定、急にどんどん体が疲れたし、腕があがらない、ああ、隣の人にどんどん抜かれていく…ゴール。

プールを上がったところのすぐ前にコースごとに小さな電光掲示板が置いてある。僕の掲示によると、僕は7番…表示が変わる？…

21…102…217。

一体、何人中なんだ？そんな疑問を抱えたまま、プールサイドを歩き出す。すると後ろから金髪が僕の肩を叩く。

「速かったな」

「そう？でも最後失速しちゃって駄目だ。君もこんな速く僕に追いつくなんてきつと速かったんだろう」

どうやら冴えない黒髪は金髪と同じ列だが、金髪と違って水泳は苦手らしい。振り返ってもまだプールサイドには見えない。

（僕ら三人は着替え終わって、水泳大会を終えた会場のある、大きな廊下を歩く。会場となったところは一級ホテルのように豪華で広い。廊下には赤い絨毯がひいてあり、天井のシャンデリアに照らされている。）

三人でわいわい話して僕は楽しくなってきた。黒髪は弱気だが良い奴だしその馬鹿っぽいところにつけ込んで面白い話が出る。金髪は少し傲慢だが、黒髪も僕も弱気な方だからいざという時には金髪は心強そうだ。

僕は二人に尋ねる。

「これからどこに行く？どうする？」お決まりの質問である。

金髪「サッカー行かないか」

黒髪「いいぜ」

黒髪はニヤケる。

サッカー行くとはい、実際にスポーツのサッカーをするわけではなく、サッカーのカードがガチャポンでとれる軽食屋に行くのである。

明らかに黒髪と金髪はサッカーのカード目当てであったから、僕はどうしようかと思ったがその軽食屋で僕はサンドウィッチでも食

べよう、と思った。

それにしても幼い。僕は二人を眺めなおした。しかしこれが僕の新しい、そして唯一の友人の二人である。それでも眺めなおすと、金髪は整った顔立ちをしているがそれより目つきによってさらに傲慢に見え、黒髪は太って、顔は不細工に見えた。

しかしこれが僕の唯一の友人である。

僕は廊下を真っ直ぐ行って突き当たりを右に壁を爆破したような歪な形の穴から外にでた。外はもう夜で真っ暗であった。

その時すごい音がしてヘッドライトの眩しい光と共に一台のバイクが僕らの目の前で止まった。

見ると金髪の兄だ。野性的だ。放蕩している金髪の兄はヘルメットを取って、黒い古びたスニーカーを僕に放り投げた。

「これ、何ですか？」

「お祝いの金だよ。一発当たったんだ。お前ら今日水泳大会だっただろ、だからお疲れさん一億。」

バイクは再びすごい音を出して走り去った。僕は呆然としていたが、金髪にやっとう言った

「お前の兄貴すごいな」

「まあな」

僕らはこのまま軽食屋に行くことにした。軽食屋はここから歩いて二分ほどである

「持つよ」

黒髪が言った

僕らはスニーカーを黒髪に持たせて、軽食屋まで歩くことにした。暗闇を歩くと自然に無口になってきた。黒髪はもうあからさまに

下を向いている。

僕は黙々と歩き続けた。

軽食屋のドアが二メートルくらいになったとき一番前を歩いていた金髪が振り返り

「ついたぞ?、……?」

目を見開く。僕もその視線を辿る。

黒髪がいない。

スーツケースを持った黒髪がいない。

僕らは血相を変えた。

「探すぞ」

僕は金髪と二人でもと来た暗い道を走りだした。自転車にぶつか
る。しかし黒髪はいない。

途中、高さは100メートルくらいあるのに、真っ直ぐの階段を
覗いた長さは30メートルくらいで頂上に一軒か二軒、店があるだ
けのモニュメントみたいな歩行者用の煉瓦の橋があったので、僕ら
はそれに登った。

頂上につくと、街が軽く見渡せ、夜景が綺麗であつたが今はそん
なことを言っている場合では無かつた。街を見渡して黒髪を探した。
その時間き覚えのある声が聞こえた。

「そう!……一億……」

黒髪だ。僕らは顔を見合わせた。家族でいるらしい。

「どこにいる……?どこにいる……?」

僕は橋から身を乗り出して橋の下を眺めた。しかし見つからない。
金髪の方を見ると思慮深げな格好で何やら考えている。格好付けて
る場合か、という思いと、やはり頼りがいがあるという安心感で半
々だった。

金髪は後ろに歩き出して、僕らが来た階段の逆側の階段の下を眺

めた。そこには黒髪とその家族がいた。金持ちらしく、父親は太っていて、母も妹も高そうな服をきている。

「どうする？」

僕は金髪に尋ねる。

「どうするってなあ……」

その時、黒髪の父親が一人、階段を登り始めてるのが見えた。

「見つかったらまずいよ、どうしよう……」

金髪に再び助けを求める。

すると金髪は目の前の二軒の店うち、空き家になっている一軒の店に目を留めた。

「ここに隠れよう」

しかしその店はガラス張りで部屋の証明がついていたので中は丸見えであった。

「ここで大丈夫か……？」

「大丈夫だ、この細いドアからはあの巨体は入ってこれないだろう」

確かにドアは非常に薄かった。そこで僕らはその部屋に「隠れ」て、黒髪の父親が頂上に来るのを待った。

黒髪の父親は「ホ～ホ～ハー」などと大声で歌を歌いながら僕らがいる部屋のガラス戸に近づいてきた。そして部屋の中の僕に気づくと再び

「ホ～ホ～ハー！」

何が何だか分からず僕は錯乱に陥った。だから口をガラスに押し付けて「ホ～ホ～ハー」と大声で歌い返した。

金髪は腰を抜かして、隅でうずくまっているようであった。僕はその部屋に隣の店へ続くドアがあるのを認めた。

僕がそのドアの向こうへ行くとそこは僕の家族の経営する呉服店であった。ガラス戸とコンクリートの床から一転して、こちらは障

子張りで、床は畳である。そして何故か床には旅館にあるような布団が二枚所狭しとひかれている。

「おかえり」

店には母と祖母がいた。

その時、ちようど、女のお客さんが来た。

「よろしいですか？」

「どうぞどうぞ」

母が答えた。

女のお客さんは綺麗な人であった。

母が対応して、その人は紫と白と藍色と緑がちようどよく幻惑的に混ぜ合わされそうな柄の服をお選びになった。その服は薄い布をたくさん様々な方向に重ね合わせて作った、今までに見たことのない、非常に上品なものであった。

その方がお金を払わずにお帰りになられようとしたその時に眼鏡をかけた祖父が帰ってきて、卑屈に笑って申し上げた。

「もう少し布団は高級な方がいいですかね……ハハハ……」

僕はいつそ布団などしかない方が断然良いと思ったのだが。

僕はただトイレに行きたかった。

下の階で、父親の怒鳴り声と「もう止めて！」という子供の叫び声が聞こえた、頭の良さと人間性は全く別のこと……僕は心を痛めない、僕は行かない。

僕は怒れない。保身のためにしか闘ったことはない。それもないのは最も幸せなのか最も不幸かのどちらか。でも一度だけ最悪のことをした。怒りもないのに些細なことで怒ったふりをした。殴った。

蹴った。何も感じなかった。怒鳴った。虚しい。嫉妬、僻みもあんまり 長続きしない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6831y/>

欲求

2011年11月20日19時34分発行